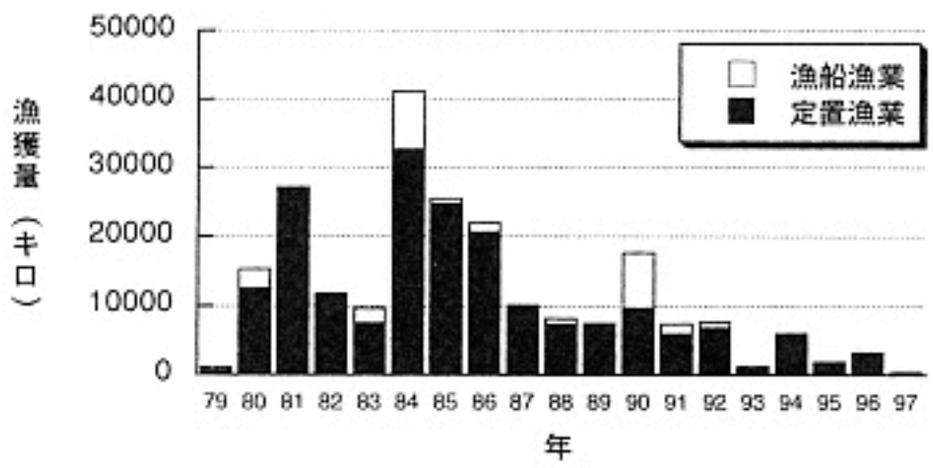
サクラマス

サクラマスの名の由来は、ちょうど桜が咲く頃に海から川に上ってくるからとも、産卵期になると婚姻色で体の一部が美しいピンク色に染まるからともいう。サクラマスという名に聞き覚えがなくても、富山名産「鱒(ます)のすし」の材料であると言えば、一度は食べたことがあるという方も多いのではないだろうか。

サクラマスは、秋、湧水(ゆうすい)のある川底で産卵する。卵から孵化した稚魚は小砂利の中で冬を越し、春を迎えるころには、全長約5センチになって活発に泳ぎ出す。翌年の春、魚体が全長15センチほどに成長したサクラマスは、魚体が銀色に変化し(銀毛(ぎんけ)という)、海に降る。降海したサクラマスは、北海道西部日本海やオホーツク海を1年間大回遊し、全長50～70センチ、体重2～5キロに成長し、生まれた川に帰ってくる。帰ってきたサクラマスは、産卵期の秋までの半年間を流れの緩やかな淵(ふち)で身を潜め、産卵に備える。ちなみに、サクラマスと呼ばれる魚の大部分は雌で、雄の大部分が川で一生を過ごす。川に残った雄と一部の雌こそ、渓流の釣り師たちから「渓流の女王」と呼ばれるヤマメであることは意外と知られていない。ヤマメは全長25センチ前後で、サクラマスと比較するとかなり小型である。

サクラマスは、1907(明治40)年頃、神通川では川舟による流し網などで年間約160トンの漁獲が記録されている。しかし、その漁獲量も年々減少し、ここ何年かは数トン台で推移している。



富山県沿岸域のサクラマスの漁獲量の推移

サクラマスは、3年の寿命のうち、誕生から降海までの1年半と河川回帰から産卵までの半年の合計2年間を、川での生活に依存している。同じサケ属のサケが4年の寿命のうち、半年間のみを川で生活することと比べれば、非常に長い期間を川で過ごすことになる。このような生活様式であるがゆえに、サクラマス資源は、河川環境の悪化によって減少に拍車がかかったと考えられる。県内河川を眺めれば一目瞭然で、防災のためとはいえ、上流にはダムが建設され、川筋は直線化されている。さらに、建築用の砂利も採取される。幼魚期を過ごす環境は壊され、川に戻ってきて身を休める淵もなければ、遡上(そじょう)も阻まれるのである。

サクラマス資源を維持・増大するための手段として、幼魚を大量かつ継続して放流することが、各内水面漁協で試みられている。しかし、近年の漁獲量の減少とともに、採卵に用いる親魚が十分に確保できなくなり、採卵量が減少している。

水産試験場では、採卵用のサクラマスを、生活様式に沿った方法で飼育することによって、大量の種卵(しゅらん)を安定的に得るための研究を行っている。海洋生活に相当する期間、熱交換した約12℃の深層水を用いてサクラマスを海水飼育することにより、1997年には、平均体重1,100グラム、最大の個体では2,100グラムにまで成長した。魚体の大型化とともに1尾当たりの採卵量も増加し、1996～1997年には30万粒前後の種卵を得ることができた。1998年には、採取した卵を一時収容しておく施設が完成した。収容した卵は、一部は親魚養成のために水産試験場で飼育しており、残りは内水面漁協の孵化場に供給している。育った稚魚は、1997年以降、県西部を流れる庄川に試験的に放流している。1尾でも多くのサクラマスが県内河川に帰ってくる日が待ち望まれる。　　(大和・辻本)